



八中だより



令和6年7月1日 7月号
調布市立第八中学校
校長 馬場 誠

HP : <http://www.chofu-schools.jp/chofu8/>

エサを待つ雛鳥から「学習の個性化」の時代へ

校長 馬場 誠

最寄りの駅にツバメたちが飛び回っています。鋭く旋回しながら、ものすごいスピードで巣のある所へ戻ります。巣にはかわいらしい雛たちが、黄色い口を開けてピーピーと鳴いています。巣に戻った親鳥は、せっせと口移してエサを与えています。今は、ツバメにとって忙しい子育てのシーズンなのですね。

しばらくそんな光景を眺めていましたが、ふと疑問がわいてきました。何羽も並ぶ雛のうち、最初にエサを与えるのはどの雛なんだろう。当てずっぽうに与えているのだろうか。自己主張の少ない雛は見捨てられるのだろうか。弱肉強食の厳しい自然界の中では、結局弱い個体はどうしても生きにくい世の中になってしまうのだろうか……。

そんな無情な世を思いながらも、疑問を解くために調べてみることにしました。すると、驚くべき親鳥の能力について知ることができました。親鳥は最初に巣の中でもっともお腹を空かせている雛にエサをあげるそうです。どうしてお腹を空かせているか分かるかという、そういう雛ほど大きな声で一瞬はやく鳴くからだといいます。その瞬間を親鳥はけっして見逃しません。すごいですね。高速で飛びながら我が子の顔をじっと見つめて誰に最初にあげるか考えていたのです。お腹のいっぱいな雛は満足しているせいか声も小さく、だんだん埋もれるように中央の位置へポジションを変えるため、お腹の空いた雛ほど右端や左端にいるケースが多いのだそうです。



子どもの様子をよく観察し、均等に育て上げるという能力。これは学ぶべき自然の力かもしれません。教室ではお腹を空かせた生徒ほどよく声を上げる、というわけではありませんが、教師は経験から、それぞれの生徒がどの程度学習に満足しているか、彼らの表情や態度を見て感じ取ります。十分に学びきれていない生徒には、分かるように言い方を変えて説明したり別の課題を与えたり、あの手この手を使ってお腹を満たすように努めています。まるでツバメの子育てのようです。

これはこれで十分に意味のあることなのですが、しかしながら、令和の時代となり、教育界ではこのようなやり方から一歩踏み出すことが求められています。つまり、同じエサを、ただ待つだけの雛鳥に与えるという昔のやり方は変わりつつあるのです。それが「個別最適な学び」や「学習の個性化」と言われているものです。

多様化する社会の中で、今後は一斉に同じことを学ぶのではなく、それぞれの子どもが自分の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げていくことが重要視されます。ですから、まず自分から、主体的に、学びの姿勢をもつことが大前提となります。特に中学生ともなると、自分の学習のスタイルをもう一人の自分が上から見てコントロールするような力が必要となります。ただ与えられるのをおとなしく待つのではなく、自分が学びたいことをしっかり学んでいるか、どうしたらもっと弱点を克服できるかなどを考えて、自分にしかない学びを作り上げていくのです。

予測困難な時代、自らの力で生き抜くことが求められます。たくましく育ってほしいと願います。